

# ゼミナール

## 環境

二酸化炭素(CO<sub>2</sub>)などの排出削減の科学的根拠を与える新しい報告書のとりまとめが進んでいる。地球温暖化の科学的・技術的評

価を行うIPCC(国連気候変動に関する政府間パネル)の第6次評価報告書である。

15年に採択されたパリ協定には、工業化前比で2度より十分低く1.5度未満を目指す世界平均気温の目標と、その達成に向けた世界の排出削減の道筋が記載された。目標と排出削減の関係は13、14年に発表された第5次評価報告書がベースとなっている。これはCOP(国連気候変動枠組み条約締約国会議)の要請でIPCC

が18年にとりまとめた1.5度の地球温暖化に関する特別報告書でも踏襲されている。第6次報告には、この数年の新しい知見が反映され、目標に対応する排出削減についても何らかの更新があるが見込まれる。

【今後の展開】第6次報告は作業部会別の評価報告書と全会一致の承認にかけられる。このようにIPCCの報告書は多くの専門家が関与し、透明性の高い手続きを経て完成する。ごく一部の個人が発する懐疑的な主張とは重みが違う。最後の承認過程で要約の表現を巡って各国政府の意向が反映されることもあるが、基本的にはその影響が本部分におよぶことはない。

# 専門家の目経て慎重に「不確実性」研究も注目

【排出削減を左右する新情報】第6次報告の注目の一つは強制力と気候感度の評価であろう。強制力はCO<sub>2</sub>などの温室効果ガスや硫酸エアロゾルなどの微小粒子による加熱・冷却の強さ(放射強制力)を表す。気候感度は強制力に対する応答の割合で、CO<sub>2</sub>濃度が2倍になった時の気温上昇を指標とする。将来の気温上昇は、基本的に強制力と気候感度の掛け算となる。実際には複雑な計算で予測するが、気候感度が気温上昇を左右することに変わりはない。

【透明性の高い入念な作成過程】IPCCの評価報告書は3つの作業部会で作成され、それぞれ世界中から選ばれた200人を超える著者が、0人を超える著者が、期限までに投稿・受理された査読付き論文を基に執筆する。著者の選定では、国・地域間

のバランスや男女比率が考慮される。原稿の執筆と査読は3回繰り返され、1次・2次原稿を専門家が査読し、2次・最終原稿を各国政府が査読する。専門家の査読には、基本的な誰でも参加して意見を述べる。この過程で膨大な査読意見が出されるが、最終的に著者の対応と合わせて、記名入りで全て公開される。

【今後の展開】第6次報告は作業部会別の評価報告書と全会一致の承認にかけられる。このようにIPCCの報告書は多くの専門家が関与し、透明性の高い手続きを経て完成する。ごく一部の個人が発する懐疑的な主張とは重みが違う。最後の承認過程で要約の表現を巡って各国政府の意向が反映されることもあるが、基本的にはその影響が本部分におよぶことはない。

【今後の展開】第6次報告は作業部会別の評価報告書と全会一致の承認にかけられる。このようにIPCCの報告書は多くの専門家が関与し、透明性の高い手続きを経て完成する。ごく一部の個人が発する懐疑的な主張とは重みが違う。最後の承認過程で要約の表現を巡って各国政府の意向が反映されることもあるが、基本的にはその影響が本部分におよぶことはない。

【今後の展開】第6次報告は作業部会別の評価報告書と全会一致の承認にかけられる。このようにIPCCの報告書は多くの専門家が関与し、透明性の高い手続きを経て完成する。ごく一部の個人が発する懐疑的な主張とは重みが違う。最後の承認過程で要約の表現を巡って各国政府の意向が反映されることもあるが、基本的にはその影響が本部分におよぶことはない。

電力中央研究所 環境科学研究所 大気・海洋環境領域 副研究参事

筒井 純一



ついで・じゅんいち 1991年度入所。専門は気候科学。博士(環境学)